

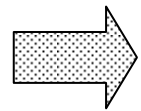
1. 総 評

川崎市市民ミュージアムの平成20年度の実績は、設定された目標に到達していないものや改善すべき点が見受けられるが、市民ミュージアムをあげて運営改善に取り組む中で成果があがってきた点があり、全体として評価できる。成果は、館長を始めとする館員やボランティアなど館を支援する関係者の自助努力の結果である。

今後、市民ミュージアムが、評価活動を通じて明らかになった諸課題について、対応方針を策定し、館の充実に計画的に取り組んでいくことを期待する。その際には、館の設置者である川崎市と十分協議し、対応方針が着実に実行されるものになることが望まれる。今後、取り組むことが期待される課題は多い。課題の解決に当たっては、館長のリーダーシップにより館の行動目標が更に明確になるとともに、館をあげて取り組む館員の協力態勢が更に構築されることを期待したい。

2. 重点項目評価シート(20年度)

市民ミュージアムがめざす姿
<ul style="list-style-type: none"> ●市民に親しまれる川崎発の市民文化の伝承と創造の発信拠点としてのミュージアム ●市民ミュージアムの強みや川崎の持つポテンシャルを活かし全国に発信できるミュージアム ●市民ミュージアムの効果的・効率的な運営に努めるとともに、地域の活性化に貢献できる拠点としてのミュージアム



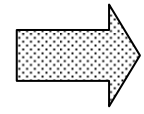
めざす姿を実現していくための第1ステップとして、以下の目標を達成していく
<ul style="list-style-type: none"> ●活動目標 <ul style="list-style-type: none"> ・独自性の確立 ・地域に根ざした存在 ・賑わいと活気のあるミュージアム ●運営目標 <ul style="list-style-type: none"> ・資産の有効活用 ・運営の健全性の保持と効率化 ・人にやさしい環境づくり

3段階評価
A: 目標を十分に達成し、成果をあげている
B: 目標を概ね達成している
C: 目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

重点として取り組む施策(実施目標)	具体的な施策(事業名称または活動内容)	担当	内部評価(自己点検)			外部評価(評定意見)			
			事業実績	成果	課題	主な評価視点	成果	課題	評定
①市民ミュージアム評価制度の導入	<ul style="list-style-type: none"> ・評価委員会を立ち上げ、制度を確実に機能させる 	総務	<ul style="list-style-type: none"> ・4月(20年度評価シート承認)、11月(20年度中間報告)、3月(21年度評価シート承認)に評価委員会を開催 ・中間報告での指摘を踏まえ、21年度評価シートを作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・改正博物館法でも評価と運営状況の情報の提供が努力規定として盛り込まれており、それに対応する体制が出来た。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後は評価結果を企画立案や業務遂行に反映する仕組みを構築していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ●「運営の健全性」に寄与したか 	<ul style="list-style-type: none"> 業務遂行におけるPDCAサイクル(plan-do-check-act cycle)を確立する手法である評価制度を、館の運営改善を図るために、市民ミュージアムが導入したことを評価する。更に、評価制度の構築に当たって、外部の専門家による評価制度を導入したことは、評価の客観性を高め、館の運営の健全性に寄与する上で意義があり、大いに評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 評価制度の真価が問われるのはこれからである。市民ミュージアムの評価制度が一層機能していくためには、館員が事業運営全般にわたり自己点検・自己評価が十分行い、その結果を十分踏まえて、外部の専門家からなる本委員会が館の実態を十分把握し、独自の観点から適切な評価を行うことが重要である。このため、今後、本委員会がどのようにすれば館の活動が一層把握できるかについて検討していくことが必要である。また、市民ミュージアムの利用者に館の事業運営全般について理解を深めていただくためにも、館の目標、活動実績や評価結果を適切に公開していくことが重要であるので、公開の在り方について十分工夫することが望まれる。 	B
②教育普及活動の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・市民ミュージアム教育研究会を核に学校向け教育普及プログラムの充実による学校利用の拡大 ・「創造する子ども展」等の教育普及展覧会の充実、新規開催 ・社会科推進事業参加校の維持・拡大 ・出前事業の実施 ・「昔のくらし 今のくらし」ムナリー展等、小中学校向けの体験型やワークショップをおりこんだ展覧会を開催 ・「夏休みこどもミュージアム」の実施 	<ul style="list-style-type: none"> 教育普及 博物館 学芸室 学芸室 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校向け普及プログラムを新たに作成し、市内全小中学校に配布。 ・中学生対象の職業体験受け入れ体制を整備。 ・プログラム、職業体験の小中学校の利用は27校、880人であった。 ・「創造する子ども展」の規模を拡大(入場者3867人、目標3000人)。 ・新たに中学校美術造形展(入場者1641人、目標1000人)、中学校技術家庭作品展(入場者約700人、目標1000人)を開催。 ・参加校は86校(前年84校)、参加人数9140人(前年8349人)。 ・旧石器時代から平安時代「江戸時代の生活」のタイトルで実施し、4小学校13クラス分 404人(前年4小学校10クラス分 370人)に行った。 ・ムナリー展で開催前にスクールプログラムに取り入れた6小学校1024人に対して行った。 ・「あかりの実験室」(35人)「こども版画教室」(2回26人)、「こども写真教室」(3回27人)「こどもまんが教室」(15人)を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育普及の担当を新たに置き、学校への働きかけや受け入れ体制を強化・整備したことにより、出前授業や企画展絡みのプログラムも含めて学校関係の利用が拡大した。また、学校関係の展覧会開催により家族連れの来館者増により、館の認知および入館者増に貢献した。 ・経費圧迫要因(参加校の拡大に伴うバス借上げ費用の増加)がある中、午後の見学を増やすことで経費増を抑えることが出来た。 ・昨年よりも実施学校数・クラスとも増加し、地域の小学生に本プログラムが根ざしてきたといえる。 ・ミュージアムと地域の関係を深めることができた。 ・小学生を対象とした普及活動を行うことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・21年度は教育普及担当を組織として新設し、プログラムの充実とともに活動・受け入れ体制を強化する。 ・学校との連携をさらに深めて、ミュージアム利用の拡大を目指す。 ・地域団体等と協働や市民参画の企画を拡大し、ミュージアムの活動に対する地域・市民の理解を深めていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ●「地域に根ざした存在」に果たしたか ●「賑わいと活気のあるミュージアム」に果たしたか 	<ul style="list-style-type: none"> 新たに教育普及担当職員を配置したこと等により、新たな事業が実施され、幾つかの事業では前年度を上回る参加者数を確保する等の成果をあげることができ、市民ミュージアムが地域に根ざした存在になる上で役割を果たすことができたことを評価する。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後、活動を一層充実させていくためには、まず、教育普及事業の対象別にミッションを設定し、当該ミッションの実現にとって重要な事業に重点的に取り組むことが重要である。また、学校との連携を深める等の多くの課題に効果的に取り組むためには、今後、予算や要員の確保を含め事業推進に必要な体制を整備して活動を展開していくことが望まれる。 	A
			【項目全体の実績・成果・課題等】						
			<ul style="list-style-type: none"> ・市民ミュージアムとしての体系的な教育普及活動を構築していくために、20年度は、まず業務ではあるが教育普及を担当する職員を置いた。 ・20年度は第一段階として、学校への働きかけと連携に尽力した。21年度は組織体制を整備し、次のステップとして、市民・地域と連携した普及活動を強化していく。 ・21年度より教育普及担当がボランティア組織を担当することとした。 						

2. 重点項目評価シート(20年度)

市民ミュージアムがめざす姿
●市民に親しまれる川崎発の市民文化の伝承と創造の発信拠点としてのミュージアム
●市民ミュージアムの強みや川崎の持つポテンシャルを活かし全国に発信できるミュージアム
●市民ミュージアムの効果的・効率的な運営に努めるとともに、地域の活性化に貢献できる拠点としてのミュージアム



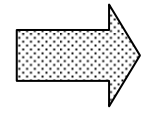
めざす姿を実現していくための第1ステップとして、以下の目標を達成していく	
●活動目標 ・独自性の確立 ・地域に根ざした存在 ・賑わいと活気のあるミュージアム	●運営目標 ・資産の有効活用 ・運営の健全性の保持と効率化 ・人にやさしい環境づくり

3段階評価
A: 目標を十分に達成し、成果をあげている
B: 目標を概ね達成している
C: 目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

重点として取り組む施策(実施目標)	具体的な施策(事業名称または活動内容)	担当	内部評価(自己点検)			外部評価(評定意見)			
			事業実績	成果	課題	主な評価視点	成果	課題	評定
③市内外の各種団体との連携強化	・市民の文化活動に対して会場提供を含めて人的にも積極的に協力	総務	・MOA児童作品展、ブラジル交流展、日韓美術展、時代まつり、水辺の楽校フォーラムなど市民発議の企画で企画展示室等を提供し運営でも協力。	・利用者数の拡大が図られ、施設の有効活用にも結びついた。		●「地域に根ざした存在」になったか ●「賑わいと活気のあるミュージアム」に貢献したか ●「資産の有効活用」を図れたか	館の目標として、市民団体やNPO法人との連携を深めることを掲げ、地域として関係の深い、幅広い団体と積極的に連携し、多様な活動に取り組んだことは評価できる。	今後、各種団体との連携強化により地域に根ざした活動が一層活性化していくためには、中長期的な視点をもって各種団体との信頼関係を築きながら取り組んでいくことが重要である。また、新たな連携先を確保することも重要である。このため、館と各種団体がどのような連携が可能か十分検討の上、地域の教育団体や商工業者との更なる連携の推進、協力企業の発掘や国内外のミュージアムとの連携に取り組んでほしい。	A
	・プロムナードコンサート、カワサキ・ティーンズ・プロジェクト、野外イベントなどの実施	企画広報	・20周年関連のイベントや企画展でも市民団体やNPO法人と連携して計画した。						
	・市民と作る企画展の方法についての検討	総務							
	・地域と連携する展示会・イベントの実施	学芸室	・「オキナワ/かわさき」展関連イベントとして、市内の沖縄県人会と沖縄芸能研究会と連携して沖縄舞踊を行った。 ・「多摩川野焼きの会」と共催で製作した土器の展示会を、11月にミュージアムギャラリーで行った。	・市民の文化団体と連携してイベントを行うことができた。	・企画展、イベント、教育普及等、館のあらゆる事業活動において、市内外の外部団体との連携機会を追求し、地域密着と集客(利用されるミュージアム)を目指していく。 ・企業協賛を受入れる仕組みづくりと、企業への働きかけを検討、実行する。				
	・「フロンターレ展」「日本陸上・スーパー陸上」等、地域スポーツとの連携	総務	・等々力競技場で行われた日本陸上選手権にあわせて、道遥展示空間で応援展を開催。	・1週間で3千人以上を集客した。					
	・各団体、企業、個人に対し、連携事業を積極的に提案	学芸室	・20周年関連のイベントや企画展でも、とどろき水辺の楽校やカワサキミュージックキャスター、高津区文化協会などのNPO法人との連携事業を実施。	・とどろき水辺の楽校:美術館とは疎遠になりがちなアウトドア派のファミリー層が、ワークショップに参加し、連携を深めることができた。					
【項目全体の実績・成果・課題等】			・市民ミュージアムの活動を、市民・市役所内部をはじめ多くの人の理解を得て、認知を拡大していくために、機会をとりえて各種団体との連携を志向した。 ・「改革基本計画」の三層構造の第一層「市民参加型の幅広い活動」の基盤づくりができた。						
④ボランティアの導入、組織化	・ボランティア活動の具体策を立案実施	ボランティアWT	・ボランティアスタッフ23名が登録し、6月より活動を開始。	・イベントやワークショップのサポート、見学者の整理・誘導など、これまでよりきめ細やかな来館者対応が可能になった。また、イベントに参加者としての協力もあった。	・事業の運営やレクチャーにも参画する体制の構築と、登録者数が不十分のため、更に募集を継続し、ボランティア組織の拡充につとめる。	●「地域に根ざした存在」になったか ●「運営の健全性」に寄与したか	市民ミュージアムにボランティアが導入され、ボランティアによる活動が開始されたことは、館と地域とのつながりを深め、館の運営の健全性に寄与するものであり、評価できる。	ボランティアを導入した目的とボランティアの活動の内容と範囲を一層明確にし、市民ミュージアムらしいボランティア制度を確立してほしい。また、学生や団塊の世代等の活力を活かすためにボランティアの募集人員を増やすことも検討してほしい。また、ボランティアの育成・能力向上やボランティアの主体性を活かした事業が展開できるためには、館がどのようにかわるのがよいかについて十分検討することが望まれる。検討に当たっては、他館の事例を調査し、効果的な取り組みになるように留意してほしい。	B
⑤情報発信	・記者会見の実施、ホームページの利用等によりミュージアムの活動に関する情報開示を積極的に推進	総務・企画広報	・年度初めに20周年の取組み、12月に実相寺昭雄氏遺品寄贈について記者会見を実施。19年度活動報告、20年度施策、ミュージアム評価制度などをHP上にアップ。	・年度初め記者会見は東京・神奈川新聞が記事掲載。実相寺遺品は全紙で取り上げ。別に10月に朝日新聞文化欄で改革状況を取材掲載。	・節目でのマスコミへの働きかけをさらに強化する。 ・運営についてのHP掲載を継続実施する。	●「運営の健全性」に寄与したか	全国のミュージアムにおいて情報発信の取り組みが十分とは言えない中で、市民ミュージアムが事業の透明性を図りながら、積極的にプレスへのアピール等の情報発信を行い、館の運営の健全性に寄与したことは評価できる。	情報発信は、館の運営の健全性に寄与するとともに、館の存在をアピールする上で重要である。情報発信が一層促進されるよう、川崎市の刊行物や地域のミニコミ誌の活用、コミュニティサイトへの配信やコンピュータ・システムの活用により戦略的に取り組むことが望まれる。	B
⑥情報コーナーの改善	・漫画単行本(10000冊)を含む収蔵図書の開架コーナーの新設	総務	・9月にミュージアムライブラリーとして約8千冊を開架して新規オープン。	・9月以降年度末まで、図書コーナー利用者数は前年同期比3.5倍の3746人となる。	・公開する図書・DVDの内容を常時見直し、市民PR、利用者サービスの充実を図る。	●「資産の有効活用」を図れたか ●「賑わいと活気のあるミュージアム」に貢献したか	市民ミュージアムの情報コーナーがリニューアルされ、図書の開架コーナーが設けられたことにより、利用者が増加したことは、若い世代を含む多様な層の来館を促す点で、また博物館資料の有効活用を図る点で大きな意義があり、評価できる。	今後、さらに雰囲気のある空間として整備することが望まれる。また、館内のサインの充実によるアクセスの向上、他のミュージアム、図書館との連携や広報の充実により、情報コーナーの存在と機能を一層アピールし、利用者の拡大を図ってほしい。	A
	・ビデオコーナーでのビデオ・DVD公開の拡大	美術館	・DVD公開100作品追加。						

2. 重点項目評価シート(20年度)

市民ミュージアムがめざす姿
●市民に親しまれる川崎発の市民文化の伝承と創造の発信拠点としてのミュージアム
●市民ミュージアムの強みや川崎の持つポテンシャルを活かし全国に発信できるミュージアム
●市民ミュージアムの効果的・効率的な運営に努めるとともに、地域の活性化に貢献できる拠点としてのミュージアム



めざす姿を実現していくための第1ステップとして、以下の目標を達成していく	
●活動目標 ・独自性の確立 ・地域に根ざした存在 ・賑わいと活気のあるミュージアム	●運営目標 ・資産の有効活用 ・運営の健全性の保持と効率化 ・人にやさしい環境づくり

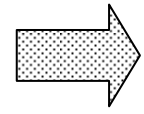
3段階評価
A: 目標を十分に達成し、成果をあげている
B: 目標を概ね達成している
C: 目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

重点として取り組む施策(実施目標)	具体的な施策(事業名称または活動内容)	担当	内部評価(自己点検)			外部評価(評定意見)				
			事業実績	成果	課題	主な評価視点	成果	課題	評定	
⑦HPの改善	・ホームページの内容を適宜改善し、アクセス件数を拡大	企画広報	・HPは見易さと情報量の拡大に留意して運営。 ・次年度に向けてHP改善の具体的な仕様を検討し、業者との契約を取り交わす。	・20年度はページビュー620,829、ビジター数81,820(参考:21年4・5月 ページビュー126,705 20年4・5月対比で+75,240) ・要望と不具合を取りまとめ、仕様を決定した。		●「独自性の確立」に役立ったか ●「人にやさしい(わかりやすい、みやすい)」ものになったか	市民ミュージアムのHPは、リニューアルにより、人にやさしい、ソフトな印象になった。また、学芸員のコラム、館長のブログにより、運営の独自性を確立することにも寄与していることを評価する。	今後、HPを更に質の高いものにしていくためには、館員やボランティアによる情報発信、展覧会情報の充実、見所の紹介、メールマガジンの発行、動画の活用、HPを活用した割引制度の導入等について検討することが望まれる。予算面や要員面の制約を十分考慮しつつ、優先順の高いものから取り組み、更にHPを改善充実してほしい。	A	
	・独自ホームページを用いた展覧会案内	学芸室	・「ムナーリのアートとあそぼう」展と「オキナワ/かわさき」展でHPを作製。	・「ムナーリ」のキーワード検索では、作製したHPが8位(72700/Google/10/1/2008)にランクづけされた。 ・「オキナワ/かわさき」展では、アンケート上で10/181人(5.5%)の方がHPを見て来館した。	・見易さを引き続き追及すとともに、フレキシブルな対応がとれる体制を構築する。 ・HP上での活動報告を充実する。 ・今後の改修及び調整の業務を健全に委託できるよう準備を行う必要がある。					
	・Webカタログを試行		・「ムナーリのアートとあそぼう」でウェブ上の展覧会図録を公開。限られた予算のなかで、展覧会の内容を詳しく紹介。	展覧会に対する来館者の関心を高めることができ、展示内容と活動内容を残すことができた。						
	・展示リスト、ワークシートや申請書類等をホームページからダウンロードが可能とする	企画広報	・一部申請書類等をホームページからダウンロード可能にした。	・HPから書式を得て申請するひが増えた。	・展示リスト、ワークシートなどダウンロードできる書類の数を増やす。					
	・カタログ販売等、ネット通販を検討		・未着手	・来年度のHP仕様変更で検討						
⑧サインの改善	・わかりやすく、整然とした館内外のサイン・誘導表示の整備と表示・掲示ルールの遵守指示	企画広報	・入り口が多く導線が複雑であるため、丁寧な表示、見易さに重点を置く。	・企画展の誘導表示でわかりやすい表現を試行した。 ・手書きビラは激減した。	・迅速かつ計画的な対応が課題。 ・マニュアル作成は全館でこれからの協議となる。 ・料金表の仕様を検討。	●「独自性の確立」に役立ったか ●「人にやさしい(わかりやすい、みやすい)」ものになったか	市民ミュージアムの館内は、どこから入場しても見取り図が整備され、サインが増えたことにより、以前に比べわかりやすくなったことは評価する。	改善されたものの、ミュージアムの空間をより洗練されたものにする上では課題は極めて多い。今後、予算を確保して、わかりやすさとデザイン性や美しさに十分配慮した、ミュージアムらしいサインを整備することが必要である。また、集客の効果をあげる上からも、市民ミュージアムを訪問する際にポイントになる交通機関等(川崎市内の要所と渋谷駅、横浜駅)や館の周囲に、館へ誘導するサインを充実することが望まれる。	B	
	・サイン等の表示マニュアルの作成			・公園内のミュージアム誘導看板を塗り替え。グランド整備による通路新設に伴い掲示板を移設。	長期にわたりメンテナンスをせず、錆びと汚れで見苦しくなっていた誘導看板の放置状況を改善。					
	・館外掲示板の整備、活用									
⑨施設の有効活用の促進(貸館サービスの強化)	・大学、専門学校・文化団体等への計画的なセールス活動	総務、企画広報	・市内の大学・専門学校3校、企業2社に出向き、貸館についての説明を行った。	・企画展示室を「ブラジル展」で初めて有料貸出し。 ・22年度、3団体が企画展示室利用を申込み。	・貸館全体の課題として、準備段階で主催者とのより綿密な打合せが必要であり、備品をはじめ貸出し要件や役割分担を明確にする。	●「資産の有効活用」を図れたか ●「賑わいと活気のあるミュージアム」に貢献したか ●「運営の効率化」に寄与したか	施設の有効活用、収益の確保や館の賑わいを創出する観点から、貸館制度を設け、利用を促進しようとしている姿勢を評価する。	現時点では、外部への周知や営業活動は十分とはいえない。今後、ミュージアムの受け入れ体制を整備し、ニーズの掘り起こしや周知などの営業活動を積極的に行うことが望まれる。また、市民や地域との関係を強化する観点から、各種団体との連携や定例イベントの創設等の方策を検討してほしい。	B	
	・都美術館休館にあたり、都美利用の美術団体へ働きかけ			・働きかけを実施。						
	・ミュージアムギャラリーの貸出し			ミュージアムギャラリーの貸出しは前年を大幅に下回る(本年3団体、前年16団体)。閉鎖状態を少なくするために主催事業を積極的にいれ、稼働率は前年61.6%に対し本年55.4%。	・ミュージアムギャラリーの利用率向上についての戦略的な検討が必要。付加価値をつけることも課題。					

2. 重点項目評価シート(20年度)

市民ミュージアムがめざす姿

- 市民に親しまれる川崎発の市民文化の伝承と創造の発信拠点としてのミュージアム
- 市民ミュージアムの強みや川崎の持つポテンシャルを活かし全国に発信できるミュージアム
- 市民ミュージアムの効果的・効率的な運営に努めるとともに、地域の活性化に貢献できる拠点としてのミュージアム



めざす姿を実現していくための第1ステップとして、以下の目標を達成していく

- 活動目標
 - ・独自性の確立
 - ・地域に根ざした存在
 - ・賑わいと活気のあるミュージアム
- 運営目標
 - ・資産の有効活用
 - ・運営の健全性の保持と効率化
 - ・人にやさしい環境づくり

3段階評価

A: 目標を十分に達成し、成果をあげている

B: 目標を概ね達成している

C: 目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

重点として取組む施策(実施目標)	具体的な施策(事業名称または活動内容)	担当	内部評価(自己点検)			外部評価(評定意見)					
			事業実績	成果	課題	主な評価視点	成果	課題	評定		
⑩20周年記念企画展の開催			【項目全体の実績・成果・課題等】 ・20周年の記念企画は、「地域・市民とともにあるミュージアム」を広くアピールし、あわせて20年にわたって収集し寄贈を受けた館の収蔵品を中心に構成し、資産の有効活用とこれまでの収集活動の市民還元を図ることを方針として企画した。 ・20周年の冠のもとで、高津区文化協会、とどろき水辺の楽校などのNPO法人を始めとする様々な地域団体に加え多くの外部団体との連携・協働を積極的図ることが出来、出張ミュージアムの開催とともに市民ミュージアムの認知向上と、開かれたミュージアムの印象形成に貢献した。一方で入場者数は大変厳しい結果となり、企画内容の練り上げ、展示の工夫、集客のための広報体制に課題を残し、今後の取組みに反映する。 ・20周年企画展4本合計の入場者目標は44500人、実績23227人。								
	●川崎ぐるっと博物館 ・川崎7区ごとにミニ展覧会を現地で開催し、その地に関連する博物館系収蔵品・資料を紹介 ・目標10500人	博物館	・川崎会場(472人)、高津会場(631人)、中原会場(248人)、宮前会場(1597人)、幸会場(636人)、麻生会場(991人)、多摩会場(555人)で実施、計5440人	・ミュージアムしかできない展覧会であり「独自性の確立」「ミュージアム発信」に結びついている。目標の1会場1500人を下回ったが、事前の予測の甘さがあった。 ・収蔵資料をもとに各区の資料を展示し、資産の有効活用を図った。							
	●濱田庄司展 ・川崎のアピール ・当館収蔵品を中心に構成 ・地域との連携 ・目標10000人	美術館	・入場者数7772人。関連イベント、濱田友緒氏講演会30名。ギャラリートーク8回には、各回30名ほど参加。	・濱田庄司没後30年、ミュージアム開館20周年を記念して、濱田の初期作品から晩年までを展観する内容。ミュージアムのコレクションだけでなく、市内のコレクターや濱田ゆかりの人々からの作品を展示して、濱田と川崎の関わりを広く提示することができた。 ・川崎市と濱田の関わりと、ミュージアムのコレクションについて、知られるところとなった。また、本展は、茨城県陶芸美術館、砺波市美術館に巡回する予定になっており、収蔵品を全国に知らしめることができる。		●「独自性の確立」となったか ●「賑わいと活気のあるミュージアム」に貢献したか ●「資産の有効活用」を図れたか ●「地域に根ざした存在」になったか	多彩な内容の企画により、市民ミュージアムらしい館の独自性を発揮し、地域の文化の特色を示すことができたことを評価する。				
	●ともに生きる展 ・当館が20年にわたって収集してきたメディア芸術の作品・資料を核として、5人の現代作家の作品とで構成した「共生」をテーマとした展覧会 ・目標14000人	美術館	・入場者数5032人、関連映画上映278人、関連ワークショップ555人 計5865人	・これまで展示する機会が少なかった若手現代作家の立体美術作品を紹介することができた。 ・NPO団体との共同ワークショップや、ボランティアが参加したの展示など、新しい試みを行った。 ・セット券のおかげで、ターゲット層以上の年齢の来館者の方々にも見ていただくことができた。 ・集客予定を下回ったのは、20周年に館として何をアピールするか、展示の担当の中心が誰なのか、20周年予算は企画展でどこまで使用できるのか等、館全体としても美術系としても方向性が定まらないまま準備期間が終了したことが大きな要因であった。 ・東急東横線渋谷駅にポスターを掲出したが、目立たず。人目を引く広報物作りの検討を。							
●粟津潔60年の軌跡展 ・当館収蔵品を活用して構成 ・目標10000人	美術館	・入館者数4983人。関連イベント(音楽ライブ、ワークショップ、展示解説、シンポジウム)1146人。関連展示の入館者数は不明(入場無料のため)。	・川崎ゆかりの芸術家・粟津潔の60年間の活動の回顧展であるが、従来のグラフィックデザインという分野にとどまらず、映像、漫画、写真というさまざまなメディア芸術の領域でも活躍した作家として多角的な面から紹介し、当館の特徴であるメディア芸術の総合美術館としての特質をアピールできた。作家の意志を生かし、現代のアートを積極的に紹介し文化を育てるという意図で、パフォーマンス、音楽、関連展示などのイベントを多数開催し、関連イベントで1,000人を超える来場者があった。他方、新聞、デザイン関係の雑誌、ホームページなどで数多く紹介されたものの、幅広い層に届くには固有の層にアピールが不足し、入館者数は目標を下回った。								

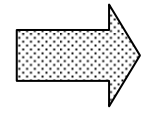
今後、館のコレクションの特徴や強みを十分把握し、市民の関心がどこにあるかを分析し、企画内容の一層の充実を図ることが期待される。市民ミュージアムらしい企画展の充実を図るためにも、「マンガ」をメインにしたものや美術と工業デザインの融合を検証する広い企画等を検討してほしい。集客一辺倒の企画にならないように留意しながら、利用者、市民・納税者が納得できる質の高い企画になるように努めてほしい。集客数については、目標は達成できなかった。今後、集客対策に力を入れる必要がある。館自体の認知度を高め、展覧会の企画内容に適合した広報活動の充実が急務である。

B

2. 重点項目評価シート(20年度)

市民ミュージアムがめざす姿

- 市民に親しまれる川崎発の市民文化の伝承と創造の発信拠点としてのミュージアム
- 市民ミュージアムの強みや川崎の持つポテンシャルを活かし全国に発信できるミュージアム
- 市民ミュージアムの効果的・効率的な運営に努めるとともに、地域の活性化に貢献できる拠点としてのミュージアム



めざす姿を実現していくための第1ステップとして、以下の目標を達成していく

- 活動目標
 - ・独自性の確立
 - ・地域に根ざした存在
 - ・賑わいと活気のあるミュージアム
- 運営目標
 - ・資産の有効活用
 - ・運営の健全性の保持と効率化
 - ・人にやさしい環境づくり

3段階評価

A: 目標を十分に達成し、成果をあげている

B: 目標を概ね達成している

C: 目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

重点として取り組む施策(実施目標)	具体的な施策(事業名称または活動内容)	担当	内部評価(自己点検)			外部評価(評定意見)			
			事業実績	成果	課題	主な評価視点	成果	課題	評定
⑪ 数値目標	●総利用者数 目標: 230,000人	実績: 176,804人 前年: 172,690人	・総利用者数は前年微増であるが、目標には及ばなかった。企画展入場者数の目標未達が一番の要因である。企画展入場者が前年マイナスの中で、総利用者数が微増したのは、出張ミュージアムを始めとする館外での活動、イベントの拡大、教育普及関係事業の強化、企画展示室の貸出し、ミュージアムライブラリの改修等々、今年度初めてあるいは前年に比べて強化した事業活動による集客が主な要因である。 ・収支比率は前年を大幅にマイナスした。歳出は人件費を中心に前年比で約9百万円の節減であったが、歳入が前年比で1350万円マイナスし、この結果となった。歳入の前年比マイナスのほとんどは企画展入場料収入のマイナスによる。	-	全国的に博物館の利用者が伸び悩む中、市民ミュージアムでも企画展入場者数は目標数値を下回った。総利用者数は、目標数には到達できていないが、様々な工夫により、前年度に比べ増えたことを評価する。	目標数値は達成できなかった。総利用者数は、前年度の実績を約4,100人(約2.4%)上回ったものの目標値(23万人)の達成度は約77%(176,804人)であった。人件費の削減が進んだものの思った程収入が伸びなかったことにより、収支比率は約4.4%で、前年度より低下した。今後、数値目標を実現するためには、館の創意工夫と努力が不可欠である。同時に、目標を達成する上で必要な予算や要員の確保が重要である。また、現在館で実施している様々な取り組みの状況を考慮すれば、現在設定されている数値目標(30万人)とその到達方法は、再検討することも必要ではないかと思われる。館の立地条件や館のポジショニングの状況に十分見合う目標数値の在り方が十分検討され、設定された数値目標が館の努力をより現実的なもの、効果的にすることを期待したい。	C		
	●収支比率 目標7.2%	実績4.4% 前年6.7%							
	●企画展入場者数 目標86,000人	実績: 55,928人 前年: 88,302人							
	●映画上映入場者数 目標17,000人	実績: 13,628人 前年: 12,159人							

※資料

○評価委員会の開催経過

- 平成20年 4月23日：20年度第1回委員会
 - ・評価制度（案）の承認
 - ・20年度評価シート（案）の審議・承認
- 平成20年11月 5日：20年度第2回委員会
 - ・上半期の進捗状況と自己評価の中間報告
- 平成21年 3月25日：20年度第3回委員会
 - ・21年度評価シート（案）の審議・承認
- 平成21年 7月10日：21年度第1回委員会
 - ・評価シートに基づき20年度の事業・活動を評価

○評価委員名簿

●川崎市市民ミュージアム運営・活動評価委員会 委員

委員名	現職	備考
今村 有策	東京都参与／トーキョーワンダーサイト館長	
内田 欽三	専修大学経営学部教授	副会長
大月 ヒロ子	有限会社イデア 代表取締役	
草壁 悟朗	川崎信用金庫専務理事	
小林 美和	市民ミュージアム協議会委員	
杉長 敬治	京都工芸繊維大学研究推進本部教授	会長
林 容子	尚美学園大学芸術情報学部准教授	
宮澤 壯佳	池田満寿夫美術館顧問（元美術手帖編集長）	

（五十音順 敬称略）